

二〇二二年度総合型入試問題（日本語・日本文学科）

- ・次のタイプ1・2の、いずれかを選んで、課題文を作成し、提出してください。
- ・課題文には表紙を付け、選択したタイプ・氏名・課題文のタイトル(タイプ1の場合は「心」、タイプ2の場合は(1)『平家物語』とし、(2)に自由なタイトル)・総字数を、それぞれ記載してください。

タイプ1

【課題】次の文章は夏目漱石「心」(『永日小品』より)の全文です。よく読んで、この小説の続きを自由に創作しなさい(おおよそ二〇〇〇〜四〇〇〇字前後)。

二階の手摺に湯上りの手拭を懸けて、日の目の多い春の町を見下すと、頭巾を被って、白い髭を疎らに生やした下駄の齒人が垣の外を通る。古い鼓を天秤棒に括り付けて、竹のへらでかんかんときくのだが、その音は頭の中で不図思い出した記憶の様に、鋭いくせに、何所か気が抜けている。爺さんが筋向の医者の方の傍へ来て、例の冴え損なった春の鼓をかんときくと、頭の上に真白に咲いた梅の中から、一羽の小鳥が飛び出した。齒入は気が附かずに、青い竹垣をなぞえに向の方へ廻り込んで見えなくなった。鳥は一搏に手摺の下まで飛んできた。しばらくは柘榴の細枝に留っていたが、落ち附かぬと見えて、二三度身振を易える拍子に、不図欄干に寄り掛っている自分の方を見上げるや否や、ぱっと立った。枝の上が煙る如くに動いたと思ったら、小鳥はもう綺麗な足で手摺の棧を踏まえている。

まだ見た事のない鳥だから、名前を知ろう筈はないが、その色合が著るしく自分の心を動かした。鶯に似て少し渋味の勝った翼に、胸は燻んだ、煉瓦の色に似て、吹けば飛びそうに、ふわついている。その辺には柔かな波を時々打たして、凝と大人しくしている。怖すのは罪だと思って、自分もしばらく、手摺に倚ったまま、指一本も動かさずに辛抱していたが、存外鳥の方は平気なようなので、やがて思い切って、そつと身を後へ引いた。同時に鳥はひらりと手摺の上を飛び上がって、すぐと眼の前に来た。自分と鳥の間は僅か一尺程に過ぎない。自分は半ば無意識に右手を美しい鳥の方に出した。鳥は柔かな翼と、華奢な足と、漣の打つ胸の凡てを挙げて、その運命を自分に託するものの如く、向うからわが手の中に、安らかに飛び移った。自分はその時丸味のある頭を上から眺めて、この鳥は……と思った。然しこの鳥は……の後はどうしても思い出せなかった。ただ心の底の方にその後が潜んでいて、総体を薄く暈す様に見えた。この心の底一面に煮染んだものを、ある不可思議の力で、一所に集めて判然と熟視したら、その形は、——やっぱりこの時、この場に、自分の手のうちにある鳥と同じ色の同じ物であったろうと思う。自分は直に籠の中に鳥を入れて、春の日影の傾くまで眺めていた。そうしてこの鳥はどんな心持で自分を見ているだろうかと考えた。

やがて散歩に出た。欣々然として、あてもないのに、町の数をいくつも通り越して、賑やかな往来を行ける所まで行ったら、往来は右へ折れたり左へ曲ったりして、知らない人の後から、知らない人がいくらでも出て来る。いくら歩いても賑かで、陽気で、楽々しているから、自分は何処の点で世界と接触して、その接触するところに一種の窮屈を感じるのか、殆ど想像も及ばない。知らない人に幾千人となく出逢うのは嬉しいが、ただ嬉しいだけで、その嬉しい人の眼附も鼻附も頓と頭に映らなかつた。すると何処かで、宝鈴が落ちて廂瓦に当る様な音がしたので、はっと思つて向うを見ると、五六間先の小路の入口に一人の女が立っていた。何を着ていたか、どんな髷に結っていたか、殆んど分らなかつた。ただ眼に映つたのはその顔である。その顔は、眼と云い、口と云い、鼻と云つて、離れ離れに叙述する事のむずかしい——否、眼と口と鼻と眉と額と一所になつて、たった一つ自分の為に作り上げられた顔である。百年の昔から此処に立つて、眼も鼻も口もひとしく自分を待っていた顔である。百年の後まで自分を従えて何処までも行く顔である。黙つて物を云う顔である。女は黙つて後を向いた。追附いてみると、小路と思つたのは露次で、不断の自分なら躊躇する位に細くて薄暗い。けれども女は黙つてその中へ這入つて行く。黙つている。けれども自分に後を跟けて来いと云う。自分は身を穿める様にして、露次の中に這入つた。

黒い暖簾がふわふわしている。白い字が染抜いてある。その次には頭を掠める位に軒燈が出ていた。真中に三階松が書いて下に本とあつた。その次には硝子の箱に軽焼の霰が詰つていた。その次には軒の下に、更紗の小片を五つ六つ四角な枠の中に並べたのが懸けてあつた。それから香水の瓶が見えた。すると露次は真黒な土蔵の壁で行き留つた。女は二尺程前に居た。と思うと、急に自分の方を振り返つた。そうして急に右へ曲つた。その時自分の頭は突然先刻の鳥の心持に変化した。そうして女に尾いて、すぐ右へ曲つた。右へ曲ると、前よりも長い露次が、細く薄暗く、ずっと続いている。自分は女の黙つて思惟するままに、この細く薄暗く、しかもずっと続いている露次の中を鳥の様にどこまでも跟いて行つた。

注

- * 齒入——下駄のすり減つた齒を、新しい齒に入れ替える仕事をする人。鼓を打ちながら行商していた。
- * なぞえ——ななめに、の意。
- * 欣々然——嬉しそうに、うきうきとした様子で。
- * 宝鈴——ここでは、寺院建築で御堂の軒端などに吊るされる鈴（風鐸）を指す。
- * 露次——露地に同じ。幅の狭い道路である「小路」に対し、更にそこから入つた、家と家との間の狭い通路のこと。

* 不断——普段に同じ。

* 三階松——松の枝葉を、三つ重ねた笠のように描いた、紋所の凶案。

タイプ2

【課題】『平家物語』を題材にして、紀行文をつくりなさい。

(1) まず『平家物語』とはどのような作品であるのか、学校の図書館にある書籍や国語便覧などで用いて、自分なりにまとめてください(おおよそ五〇〇字程度)。

(2) 『平家物語』には日本全国のさまざまな地域がでてきます。あなたはどこに行ってみていですか。あなたが興味のある『平家物語』の舞台となった地域を二カ所〜三カ所、取り上げて、その魅力を紹介してください。その土地だけでなく、その土地にかかわりのある人物に注目してもよいし、歴史的イベントを取り扱っても構いません(それぞれ、おおよそ一〇〇〇字程度)。

【注意点】

- ・ 字数は目安です。(1)と(2)を合わせて、おおよそ二〇〇〇字から四〇〇〇字前後。
- ・ 書式は自由です。
- ・ 参考とした図書を引用する場合は、必ず、自分のことばとの差異がわかるようにしてください(引用文を「」で括る、改行・段下げにする、等)。
- ・ このレポートを書くにあたって、参考とした図書などを「参考図書一覧」として最後に付けてください。その際、参考の解答例のように、書名・出版社・出版年を記載してください。なお「参考図書一覧」は字数には含みません。Webサイトを利用した場合は、URLと最終閲覧日を記してください。ただしウィキペディアからの引用は認めません。

以下、(2)の解答例を示します。例で取り上げられている地域は一カ所のみですが、実際の解答では【課題】にある通り、二カ所〜三カ所を取りあげてください。

【(2)の解答例】

清盛と福原

まずわたしは現在の兵庫県神戸市である「福原」に行ってみたい。福原は、治承四年(一一八〇)に平清盛が京から都を移したことで知られる。平清盛は、安芸(広島)や、播磨(兵庫)といった瀬戸内海周辺の国々の国守を務めており、安芸には平家の栄華の象徴として厳島神社を再興して、独自の宗教的基盤を整理したが、それは瀬戸内海の交易上の利権が、平家との強固な地盤の上にあることを当時の社会に印象づける行為でもあった。瀬戸内海に注目することは、当時としては東アジアを意識することにもなるのではないだろうか。東アジアには、巨大な経済圏や文化力をもった国々があることを清盛は熟知していたと思う。『平家物語』の中にも息子の重盛が病気になる時に、宋の国から来た医師に治療をさせようとしている章段(「医師問答」)があることも注目される。

『平家物語』の「都遷」は、「奈良炎上」とならび、清盛の悪行の極まりとして記述されるが、実は新しい都として選ぶにはふさわしい場所であったのではないかとわたしは考え

た。経済的な利点を考えての遷都であったのだと思う。そもそも遷都という大事業を興すのであるから、それにとまなう経済的効果も計算されていたのではないか。

『平家物語』『筑島』では、清盛が、福原に港を築くうえで、人柱を立てようとする公卿たちの古めかしい迷信めいた案を退けて、「経の島」を築く物語が記される。経の島は『平家物語』『入道死去』では「骨をば円実法眼頸にかけ、撰津国へくだり、経の島にぞをさめる」とあり、清盛自身の墓所であったとも記されていて興味深い。

現在、その島は残ってはないが、その事跡が偲ばせる「築島寺」といった場が残されている。東の鎌倉を目指した源頼朝とはまた逆のベクトルをもって西の海に眼を向けた清盛の新しさを想う地としての魅力がある。そういえば『平家物語絵巻』には立派で巨大な唐船が描かれているが、あのような巨大船を平家はどこから手に入れたのだろうか。海外から輸入したのだろうか、などいろいろと考えが派生していく地である。わたしたちも、海の向こうに新しい経済圏・文化圏を察知した清盛の先見性と行動力に何らかのインスピレーションを得られるのではないだろうか。

(九〇〇字程度)

「参考図書一覧」

- ・『物語の舞台を歩く 平家物語』(佐伯真一・山川出版社・二〇〇五年)。
- ・『新編日本古典文学全集 45 平家物語 ①』(市古貞次校注、訳・小学館・一九九四年)。

二〇二四年度入試・六月の進学説明会・総合型入試体験談

漱石とAさんのコラボレーション「心」(『永日小品』より)

Aさんは、漱石の描いた「心」部分をすべて「すでに死んだ男の魂の世界」とした!

「永遠に続く春の一日としての、死の世界から、物語が発発する……」

・彼が、一人の女に誘われるままに、暗い露次に入ってゆくと、水が、ひたひたと、足元を濡らし始め、膝、腰、ついには彼の全身を水底に沈めてしまう。

・気がつくくと、彼は一羽の黒い小鳥になっている。

・盆提灯の灯る幻想的な町並みを眼下に眺めながら、彼⇨小鳥は、鈴の音に誘われて青葉を繁らせた梅の木にふと止まる。

・見上げた先の窓辺に、女がひとり。彼女は、

「おかえりなさい」という。

・突然、彼は、自分が今年の春先に死んでいた、ということを知る。(漱石の「心」の)女は、自分が死んだと気づかぬまま春の一日(「死の世界」)に閉じ込められた男の魂を救うために、小鳥となってやってきたのだった(「閉じた世界に空洞を開けた」)。

・永遠に繰り返されるはずだった春の一日、彼の魂の世界に、時間が流れ始める……。

タイプII レポート

2023年度過去問題集P4、P5参照

2023/06/10 進学説明会

日本語・日本文学科 平田英夫

タイプII レポート

- ある作品、文章、人物、地域、時代、テーマ等に関してレポートを作成する。
 - 「～世紀の…について」のような比較的広いテーマが設定される。
 - ※昨年度は、「『平家物語』を題材にして、あなたの紀行文をつくろう。」
-
- 課題となる作品理解が重要。
 - 教科書や国語便覧等の資料集、書籍、信頼できるインターネット情報などの活用による調査・資料解析・問題把握を期待。

問題（1）『平家物語』という作品について

- ・『平家物語』についての基本情報（時代背景や作品の成り立ちや性質等）を把握する。作品理解を深め、（2）を記述するために用意された問いなので、自ら調べて書く。

→複数の書籍等を見て、まとめる。

問題（2）について —基本的な注意点

- ・ 現代語訳付き『平家物語』を読もう。
→目次にあたる「章段」を見てみよう。
（P5の参考図書一覧、参照）
- ・ 『平家物語』の舞台をめぐる、といったテーマを持つ関連書籍を読むのも有効。（P5の参考図書一覧、参照）
- ・ 自分が行ってみたい場所をリストアップする。
- ・ 物語上、どのような役割や特徴があるのかを把握する。
- ・ 場の持つ基本情報を集める。信頼できるネット情報も有効。
- ・ 原文を一部、引用して書くと印象がよくなる。

問題（2）について —優れた解答を記述するために

- 問題文と解答例をしっかりと読む。何度も読もう。
 - 問題文と解答例には、書いておいて欲しい要素が網羅されている。
- 2023年度版は「魅力の紹介」といった点に、どのように対応するのかが、ポイントでした。
 - 自分自身が、何に興味を持ってその場の魅力を紹介したのか。具体性が大切。
 - 自分の考察を自在に書こう。

そのほか、注意すべき点

- ・ 参考資料を明記する。
 - 特にネットの引用元URLの記述を忘れないこと。
- ・ 日本語の文章をきちんと書く。
 - 段落に分けて書く。
 - 誤字脱字をなくす。
 - 文章を校正して、不自然な箇所を訂正する。
 - ほかの人が読んで理解できるようにしておく。
- ・ 『平家物語』を読んだテキストについて答えられるようにしておく。→ 面談の時に質問される可能性も。